



昭和50年(1975年)

11月号(No. 365)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

定価一部 100円

目次

本文

ヒマラヤ遠征の本質を求めて

(原 真) ……(1)

UIAA総会に出席して

(佐藤テル) ……(2)

山を歩く

初冬の筑ヶ岳, 所の沢越え

——先人中村清太郎を偲ぶ——

(松家 晋) ……(4)

老いらく山日記(高橋憲二) ……(6)

船形山残感(伊達篤郎) ……(8)

アルパイン・ソング

「山の歌」の訳詞者を訪れて

(久保孝一郎) ……(4)

グリンデルヴァルト・リゾート

(井手貴夫) ……(6)

行事・集会報告

昭和50年度山梨支部総会報告 ……(8)

創立70周年記念北海道集會報告 ……(8)

武蔵野の夕べにヨーデルを

聞く会報告(坂倉登喜子) ……(8)

アルバータ登頂50周年記念会報告

(片山全平) ……(9)

図書紹介

『ぎふ百山』(横山厚夫) ……(9)

その他

元役員村尾金二氏を悼む ……(9)

会務報告, 会員動向など ……(11),(12)

ヒマラヤ遠征の本質を求めて

カラコルム・ピアフオ氷河から

原 真

日本を出てから四十日になりました。パキスタン政府から突然ラトック(七一四〇メートル)という未知の山の許可が下り、六人の小隊を速成してやってきたわけですが、実際には未知の山群の困難さをあらためて知らされたというのが本音です。過去に登ったアコンカグア南壁やマカル・南東稜は、むずかしいルートではあっても、地形的には未知の山ではありませんでした。ラトック山群はピアフオ氷河を中心とするシプトンの地図に含まれているとはいえず、それはあくまで遠望による推定図で、登山を目的としてこの山群の中心部へ入って、詳しく調べた人間はまだいないようです。

今年は、イギリス隊がバインター・ブラック(敗退)、京都の人たちがラトックⅡ峰(登攀中)、われわれがラトック主峰へ来たわけです。また昨年静岡の人がバインター・ブラックを試登しています。いずれも突然許可をもらって、あわててやってくるのが実情なので、この山群の総合的な検討もできぬままに帰っているようで、七〇〇〇メートル前後の困難な未踏峰を五つも持つこの山群の登頂のための概念は、まだはつきりとかまれていないわけです。

日本を出る前の私の気持としては、もしいいルートが発見できれば、一撃で陥落できるような強力なメンバーをそろえる一方、しばらく海外遠征から遠ざかっていた東海支部としては、できるだけ長期のヒマラヤ計画の基礎を作るための準備活動をするという、二つの目的を持っていました。

ラトック山群はピアフオ氷河(南面)とチョクトイ氷河(北面)にはさまれており、ベースキャンプをどちら側の氷河におくかがまづ問題となりました。この点については資料がないのだから偵察してから決めようということで、まず先発隊員をラワルピンディーへ派遣したところ、全隊員は一緒に行動してほしいというパキスタン政府の要求に陥りました。そこで北面をトレッキングした人の話による北面絶望説をとり、まず南面に入ることにしました。といってもラトックの南面を完全に見た人はいないのです。シプトンの地図で南面の傾斜がゆるいことから、漠然と南面の方に可能性がありそ

うだという感じがしたまでです。実際に南面へ来て見ると、ラトック主峰の取付きまでキャンプが三つも必要という遠さのうえ、ナダレと落石に洗われるラトックの南壁は、危険で手がつけられないことがわかりました。主峰に関しては南面がだめな以上、北面にルートを探すべきかという点についてはおもしろいようなルートが発見できました。Ⅱ峰は現在京都の人たちが西面から長い岩稜を試みておりますが、南面に比較的小さい氷と岩のルートがあります。Ⅲ峰に関しては見事な垂直に近い岩稜があつて、これは恐らく将来の課題としては誠に興味あるルートといえそうです。Ⅲ峰は六九五〇メートルですが、マッターホルンよりさらに格好のよい山です。登山許可を持つていない以上、これらの山に手をつけることができないのはまことに残念というしかありません。

一カ月かかって南面の試登と調査を終ったわれわれは、重大な決定を迫られることになりました。あくまでも登頂を目指して北面に物量を移動するか、登頂を断念してこの山群を調査するかということ。もし北面にやさしい雪の稜線であれば迷わずに猛進するところですが、実際にはそんなルートが北面にあるとも思えず、あったとしても恐らくはひどい岩稜だろうと予想されます。そこで私は登頂を断念して山岳探検隊に転向することにしました。将来への成果を多くするためには、こういう決定は早い方がいいと考えられます。腕がむずむずしている隊員にはまことに気の毒ですが、隊を分散して南北からこの山群をできるだけ調べ、各峰の登頂の可能性や接近ルートの研究することになりました。その結果については、いずれ発表の機会を持つことができると考えております。

私たちは日本を出る前に極力前宣伝をひかえてきました。ティルマンは、こんなことを言っています。

「ヒマラヤへ行こうとしているとき、自分の意思を喧伝するのは愚劣なことである。結果が出てからでは、不成功に終わった登山を、たんなる偵察だったとして評価することはむずかしいからだ」と。アンナプルナのように偵察と登頂が

一致するような登山は、まれな幸運といえるでしょう。ティルマンの言葉は弁解としてではなく、ヒマラヤをよく知る者の名言として私の心を打ちます。

日本の登山界では、どちらかといえば鳴り物入りの宣伝が幅を利かし、大がかりな見せかけにかくれた無内容の登山が一部に流行していますが、こうした風潮から絶縁して我が道を行こうと心をかためつつある私としては、偶然とはいえカラコルムの未知の山群へ迷い込んできたことには、何か啓示的な意味があるように思われてなりません。アコンカグア、マカールの成果を厳密に点検してみた結果、少数精鋭主義と長期的計画こそ、ヒマラヤ遠征の本質であると確信するにいたった私は、その線に沿う計画を仲間たちと毎日楽しく話し合っているわけです。でも人間は五〇〇メートル以上の高所に来ると大分頭のめぐりも悪くなるようで、妄想の十分の一も実際には実行できないことになるかもしれません。

カラコルムへやってくるのははじめてのため、ネパールとは異なるいろいろな事情を珍しく体験しているわけですが、日本でいろいろ聞かされた話はみな断片的で、さしたる参考にはなりませんでした。形式とはいえ、日本の国内で物知り顔の連中に、われわれの計画がチェックされたことを思い出すとまったくこっけいな気がします。われわれは最初に計画し、偵察した山とはまるで異なる山の許可をもらって出てきたのですから。日本での書類審査の馬鹿らしさを説明することは、ちょっとむずかしいといえましょう。一言で要約すれば、それはヒマラヤ登山の精神と正反対の、官僚主義といふことでしょうか。

*

毎度のことですが、日頃不勉強な私は、ヒマラヤへ何冊かの本を持ってきました。なかでも御恵授いただいたメイソンの『ヒマラヤ』を興味深く何度もひもといております。日本で読むのとはちがつてさし迫った生き生きとした味わいがあるものです。私の無教養のせいもあるのかもしれませんが、初版の時代から持っていたこの本が、かくもおもしろいことをおそまきながら、今頃カラコルム山中で発見した次第です。

とかく目先の記録を追いがちな私たちは、メイソンを読みながらヒマラヤの歴史を雄大な叙事詩としてとらえなおすことができるのは誠に幸いです。どちらかといえば地味な文体ですが、ヒマラヤを熟知するメイソンの登山観が、不動の信念となつて行間にあふれているところがみごとです。ブルースやロンドスタッフやシブトンの業績はむろんのことですが、たとえばパウエル・パウアーがカンチ

ンジュンガやナンガ・パールバートで行なった試登やまことにすぐれた退却ぶりなどは、あらためておれわれの胸を打ちます。K2におけるハウストンの功績なども同じですが、ヒマラヤの歴史がいかに不屈の精神によつて積み重ねられて来たかを、あらためて知ることができます。メイソンは「エヴェレスト、ナンガ・パールバート、K2などの登頂は、たとえそれらが将来のための模範を作ったにしても、過去の名譽なのである。そのうえ、過去の経験はだんだん積み重なるものであるが、そうした過去の教訓の幾つかを、無視しようとする傾向があるように私には思

UIAA総会に出席して

佐藤 テル

一九七五年のUIAA総会は、オーストリアのオーパータウエルン高地（一七三五メートル）にあるオーストリア山岳会のワイズマイヤー山荘で、九月四日が常任委員会、五日が総会の順序でひらかれた。

* 会場

オーパータウエルンはチロルの北東、有名なザルツブルクよりバスで約二時間の登りである。雄大な山と山にかこまれた谷間に牛の

えるのだ——おそらく私が段々年をとってきたからでもある」と言っています。これは私などにとっては、多少耳のいたい言葉ですが、カラコルム山中でメイソンを再読し、いくらかの罪滅ぼしをしたような気分になつているところです。

思わず長い手紙になつてしまいましたがお許しください。これをもってカラコルム遠征の中間報告にかえたいと考えております。山岳会諸兄よろしく。またのち程カラコルム事情などまとめてお送りできると思います。（一九七五年八月二十四日、ビアフォ氷河バインタにて、望月達夫宛）

群が鈴の音をひびかせ、草をはんでいる、いかにも欧州アルプス的风景である。その低地にある山荘は、オーストリア山岳会の元老で、この地方のリーダーであるワイズマイヤー氏がこの山荘の建設にあたって大いに功労があったので、彼の名を付したもので、そこが今回の総会々場となった。

小屋は三階建てで、その右隣りに古い山小屋式がある。多分そこへ新しいワイズマイヤー小屋が建増しされたものと思われる。古い

い小屋は小集会所として使われている。新しい建物の階下は、バーム隅にある食堂、優に一五〇人は収容できる立派な室で、新建材でない本物の木材がどしりと使われている。二階、三階はツインベッドの客室で、三十六室ほどある。建物全体の飾りつけ、特に会場にあてられた食堂の厚地のカーテンの色や、柱にかけられた緑の葉、シダなどのみごときには、さすがヨーロッパ的な感覚と舌をまいたほどである。

到着当日の夕食は各自がここですませたのであるが、私は勝手のわからぬ一人旅であつたので、ザルツブルクで簡単にすませた。

* 常任委員会（九月四日）

翌五日の総会にかける議題を充分に議論し討議して、イエスカノーかを決めようという、きわめてビジネスライクな会合で、三十六名ほどが出席した。日本は常任委員ではないので本来は出席できないが、特にオブザーバーとして評価してもらつたのである。総会における議事の準備会のようであるし、総会にかける必要のないと思われるものも一応ここで皆で話し合う。総会はこの決定を形式的に賛否するのである。常任委員会で討議された主な議題は左記のとおりである。

一、ケベック、イラン、インドネシア、ネパール、ペルーおよび

グアテマラの入会を認めるかどうか。

一、一九七二年以来会費未納のモロッコを除籍すること。

一、既に入会している国の他の団体が新規会員として申込んだ場合は、入会を許可するや否や。

例、スウェーデン山岳会は既に会員であるが、スウェーデン山岳連盟が入会を申込んだ問題を取り上げ、UIAAは一体、いくつの連盟を認めるつもりか、イタリアは既に二つの連盟が入会している（新しく申込んだケベック山岳連盟と南チロル山岳連盟は、激しい討論の結果入会を認められた）。しかしこの問題は非常にややこしく英国代表の反対論も出た。

一、UIAA機関紙発行の件。
一、雪崩探知機の装置およびその標準化。

これは国際救助隊（IKAR）とUIAAとの協力の精神にもとめる点が生じる可能性があるもので、実際の結果は公けに報告しないことにした。

しかしこの探知機をUIAAとIKARの協力で生産化し、しかも周波数や波長を変えずに、現在のままを基準化できるように希望をする。非常に困難であるが。

この周波数や波長を増やさずに標準化するよう工業界に働きかけて、これをいかに利用し、活

用するかなどを派手に宣伝してもらいたい等々。

一、ルクセンブルグで行なわれた青年集會に於けるテントのキャンプは成功であった。

一、UIAAの赤字補填のためパッジをスイス・フランでは8、オーストリア・シリングでは55で売る（日本円にすれば約一〇〇〇円である）。銀製のものはUIAAに功労のあった人に与えられるものを真似て作った銀メッキである。

一、シェルパの技術およびモラルが低下しているからヨーロッパの有資格者をネパールに派遣し、登山技術および用具の正確な使用法などを指導する必要がある。この目的達成のための学校を建てたい。

一、登山、スキー用具の改良、開発のために従来の安全委員会と資材委員会が発展解消して新しく安全委員会となり、双方の委員各十二名がそのまま新しい安全委員として残る。

一、アルパイン・パスポート
五、六カ国同志間で山岳小屋その他を正式会員並として使わせて欲しい。至急小屋委員がこれを検討し、UIAAに報告すること。

以上

*総会（九月五日）

一九七五年の総会は36カ国より

代表者が各一名ずつ出席したが韓国はスイスに代理を委任し、チリはスペインに、グアテマラもスペインに委任した。

主要議事は、
一、新しい常任委員の件。

一、オランダ、ベルギーおよびオーストリア間の問題はなるべく早く解決するよう（注、オーストリアが他国に支部を出し、その正会員よりもオーストリアの支部会員の方がはるかに特典があることなど）努力すること

一、機関紙に三カ国語を載せるので費用が倍にもなる。減頁をするかどうか（だいたいの意見は減頁反対、むしろ増やして山の記事をもっと載せること）
一、モロッコ復帰の件（未払いの会費を納入すれば復帰を認めてもよし）。

一、十月二十日までは従来通り、その後は会費を値上げする。人数に応じたスライド制。
一、ネパールのシェルパの指導教育に二、三名の指導者を選出する。

一、チェコスロバキアで青年集會を催したい。
一、オーストリア、ベルギー、オランダで来年のスキー選手権争奪が行なわれ、UIAAは競技にも関係するか否か来年の常任委員会に取り上げてほしい。

一、来年のUIAAはスペインのマドリッドで十月十日にひらか

れる。
一、来々年の開催を韓国とメキシコが申出ている。どちらとも今、決められない。

等であった。常任委員でない国

の代表はその会員数に応じて投票権がある。日本は三人分である。ある国の代表者は、日本は人口の多い国なのにわずか三人とは考えられない。実際より少ない人数で申請しているのではないかと

言うので、私は「いかに日本は人口が多い。スキー人口、登山人口も多い。現にJACは会員番号は七〇〇〇代になっているが、実際に会のために動いている会員は一〇〇〇〇人に満たないくらいである」と答えた。彼は信じられないような顔をした。

ヨーロッパおよび地元の山岳会からは夫人や娘、息子を同伴した人々が多かった。

総会の最後の晩餐会は会場であてられたワイズマイヤー山荘で行なわれ、その席上、各国からおみやげが主催国に贈呈された。日本からのかぶとは非常に好評で、オーストリア山岳会の代表ヘッセ博士は、早速それをかぶって披露した。あとで各国からのみやげがテーブルの上にならべられ、皆に見せられた。ある代議員は「クリスマスのようだ」と評していた。

すべての責任は五日の夜で終り六日にオーストリア山岳会主催の音楽会がザルツブルクのマールブル

宮殿で催された。ザルツブルクはモーツアルトがその半生を過ごしたところであるので、モーツアルトの室内楽が披露され、そのあと、ザルツブルク市主催のカクテルパーティーに招待され、皇太子の居城であった広い宮殿に案内された。女性はカクテルドレス、男性はダークスーツを着て、スポーツシャツ姿の山男達も急にハンサムになり、なかなかみごとであった。

*総会とパーティー

もともと年に一回の総会であるから、形式的に賛否を問ひ、議決をしなければ短時間に運ばないのはわかってはいるが、常任委員会にかけられる前に既に個人的なカクテル・パーティーとか、スキー場での夜の団樂とかでだいたいの方針がきめられるように考えられる。社交パーティーはどこでもこのような意味を持つものであるから、UIAAの常任委員たちの家族ぐるみのパーティーもこんな役割を自然な形で演じているのではあるまいか。とすれば、アジアで孤立（？）しているような今までのJACのUIAAに対する考え方をこの辺で一步前進させ、積極的にUIAAに興味を持ったらどうであろうか。なるほどヨーロッパはわれわれにとって遠い国で、むしろヒマラヤの方が近い。UIAAはヨーロッパ問題に偏重して

いる観を私は持っていたのであるが、シエルバの教育や、雪崩検知機となれば国境を越えたわれわれの問題と考えてもよろしい。

山の少ない韓国がUIAA大会を一九七七年に招聘しようとする企画は、たとえ、それが多分に政治色を帯びているにしても、山岳人たちの気持が国際的なまとまりを見せているようで日本人として大いにうらやましく感じた。

オーストリアの山岳地帯での今回の総会はUIAAを将来自国で開こうとする国には非常に大きな示唆を与え成功であったと思う。

充分な資格のない私を代議員として推薦して下さった役員の方々に感謝の意を表し、御期待にそい得なかったことをお詫びする。

付記―特に親しく話をした人また伝言をたのまれた人、その他

●McAith-Nassos A Tzarizanos
UIAA mark の件は現在このようになっている。

私「日本の特許庁では多分それを却下することになると思うが、審議に二年はかかると思われる」
「私は自分の職業柄それがどんなに時間のかかるものかよく知っている。もう少し具体的に詳しく知りたい。私「帰国後早速その方に詳しい者からきいて書面で知らせよう」
是非たのむ。

●Juan Pablo Nicola (代表)

French 3631 PB, Buenos Aires, Argentina

誰でもアルゼンチンに来たら、是非連絡をとってほしい。

●Eugene Gippenteitler (ロシア代表)

USSR, Moscow, D 308,

Ul. D Bednogo, Dom 22

Korpus 3, KV. 27

田村俊介によろしく。どうしているかな。日本からバチューラークラブと言うグループがわれわれの山を登りにきておどろいた。七月、八月の登山研修には日本から若い連中をたくさん送ってほしい。

●Ing. A. Nouruzi (イラン代表)
Vice-President of Iranian Mount-

山を歩く

初冬の策ヶ岳所の沢越え

―先人、中村清太郎を偲ぶ―

昨年の初冬、大井川上流二軒小屋での紅葉会に参加した翌朝早く、落葉松の散り敷く道を一人で転付峠へと登っていった。

今日はどこまで行けるだろうか――できれば策ヶ岳まで行きたいが、場合によっては樫松尾あたりでビバークするようになるかもしれない――そんなことを考えながら、肩にくいこむ特大のリックの重荷に耐えていた。天気は快晴で振り返るとマンボー沢の頭を朝日がオレンジ色に染めていた。

白根南半の尾根歩きは途中、小屋と水は断念しなければならぬ。このため、峠下の水場で用意してきた特別大きなタンクに水を入れると荷はまた一段と重くなった。転付峠から見る赤石、聖などの嶺々にはまだ新雪は来ておらず灰色のままであった。

tainering Fed.

鈴木氏によろしくと言われた。

●Dr. Hans Donke (ドイツ代表)
日本に行ったことがある。吉沢氏に

よろしく。

●Jose A. Ochizola (スペイン代表)
神原夫妻によろしく。あのお嬢さんは大きくなられたらう。一緒に山を登った。

松家 晋

山懐へと向う回数が自然と多くなつた。ことに、南部の原生林と苔におおわれた奥深い山々を静かに歩くのはよい。どこまでを何時間歩くのか、どの地点まで行かなければというのではなく、行けるところまで行ってビバークするというそんな登り方をよくするようになった。明治の末、中村清太郎が大井川奥山の原始の沢や尾根に足あとを印していったときのように、自然の中に融け込んでしまう山旅に魅せられるようになった。保利沢山の巻き道から見ると、大井川を隔てて迫る荒川岳は大きく、なかでも千枚岳の大ガレが立ち、一枚の大きな大きな葉を立てたように一本の筋になって足下の大井川に達しているのはすごい。小さな鞍部に出ると、誰かが書いたのか、立木に「名無しのコル」とあるのも南アルプスらしい。

「山の歌」の訳詞者を訪れて

久保孝一郎

一九七四年版『山日記』に収載されている「山の歌・スコットランド民謡」の訳詞者中村為治氏が、もう四十年前も前にぼくが在学していた東京商大(現・一橋大)予科の英語の先生であることを教えてくれたのは、たしかぼくの学校の先輩の望月達夫氏だったと記憶している。

ぼくは級編成のついでで予科在学三年間に先生の授業をうける機会はなかったが、山岳趣味の理解者として関心を持っていた。先生は当時すでに岩波文庫版キプリングの訳者として著名であったが、国立の榛林の中のお住いで野羊を飼って乳を自給されるなど、田園生活者、否野人として、学生の間では「為さん」というニックネームで、一風変わった存在であった。

その先生の長男讃治君が、ぼくの本科三年のときに、予科一年としてぼくらの山岳部に入ってきた。彼は戦中戦後の苦しい時期に同期の友人と協力してよく登山に励み、ぼくらの山岳部の存立と伝統を後代へ伝えた。さて、終戦の翌年と記憶するが、讃治君の發議で中村家は先生が教職を辞めて乗鞍山麓番所

に移住してしまつた。当時この噂を聞いてぼくは、番所は良いところだが、何も敗戦直後の食料物資不足のときに、穀倉地帯ならともかく、この寒村に引きこもることはあるまいと思つた。仄聞するところでは「配給米は恩給で賄える。あとは小さい自力で創り出す」と、いわば一種の開拓者精神で、この地の自然美に惚れこんで行つたそう。

この良き山仲間の讃治君は、不幸にも昭和三十六年六月七日交通事故で急逝し、その慰霊をぼくは気にかけていたが、今年はその命日の頃につこうがついたので、先生を訪問しようと思つたわけである。

ただし先生の野人的性格には、狷介ともいふべき厭人癖があり、ために御機嫌の悪いときには一喝を、また音信を試みても梨の礫を食わされた者もあり、人を容易に近づけぬことでは仲間うちで一種の伝説的な存在で、要約すれば「こわい先生」であり、逆にこの性格がきびしい番所永住を耐えさせたのであろう。

ぼくは最悪の場合、門前払い

道をおおっているモミやツガの枝をかき分けながら倒木を乗り越えたり、くぐったり、尾根からはずれて迷ったりしながら地図上、二五三九メートルのピークに着いた。「生木割」の標識が立木に打ちつけてあり、シラビソの原生林におおわれた奥深い感じのする山頂であった。

鞍部に達するガレを渡って急登すると山頂のすぐ下の尾根上に狭い窪地があった。踏跡はそこから尾根伝いに右へ下っていることから、その上がどうも偃松尾の山頂のように思えたのでリュックをその場所において登ってみた。名のとおり広々とした窪地におおわれた山頂であったが、標識など人工的なものは何一つ見当らなかった。尾根の窪地に風を避け、少し狭いが落葉を掻き集めてその上にツェルトを張った。夜通し西風が梢を鳴らし、寒気が厳しかった。

翌朝、再び偃松尾に出ると、足もとから一面に雲海が広がり、その上に富士が大きくシルエツトになってそびえていた。その右肩から日が昇りはじめた莊嚴な一瞬、思わずひざまずいて拍手を打った。そのような神々しい感動を覚えた。偃松尾から尾根伝いに見る笹ヶ岳の姿もよい。大笹、小笹の特異な双峰が急峻な尾根を二分してそびえている。偃松尾から笹ヶ岳にかけて原生林の美しいところであるが、甲州側は部分的に尾根に至

るまで伐採が進んでいた。その代償にか、すばらしい富士の展望には事欠かなかった。

苔と原生林の急坂を登りつめて、偃松やシヤクナゲをかき分けて、笹ヶ岳の標識のある山頂に達した。西風が冷たかったが初冬の山頂は鋭く澄み渡り展望に不足はなかった。ことに大井川を隔てた赤石本峰の大山脈が南からはるか北へ延々と波打って続いているのは圧巻だった。上河内、聖、赤石、悪沢などの各山容は特に近く大きく足下には鳥森山が深い大井川の溪の中に盛り上がり、そのわきに川原の一部が白く光って見えた。

先人、中村清太郎は明治四十四年の初冬にこの山頂に足跡を印している。彼は井川の田代から安倍川の上流に至り、これを詰めて甲州の雨畑へ越え、ここから笹ヶ岳に登ったのだった。このとき予定していた案内の猟師の同行が得られず、いったんは笹ヶ岳登山を断念し、七面山を越えて帰りかけたが西の笹ヶ岳を仰いではいきまきられず、ふたたび雨畑にとつて返し、別な猟師を雇ってついにこの山頂に至り、念願の赤石の諸高峰を大観したのだった。のちに、中村清太郎はこの山旅を「赤石以南の暗黒境へ分け入る準備予察といふべきものであった」と記している。（『山岳漫遊』昭和十九年）

川奥山の概要がつかめるとみた中村清太郎の洞察力も優れたものだった。そしてこの翌年、実に二十四日間にもおよぶ大井川奥山の記録的な山旅をなしたとげたのであった。これらのことから、当時彼がいかに笹ヶ岳に登ることを欲していたか、ひいては赤石南部の山々に情熱を燃やしていたかを伺い知ることができるのである。

午後になって間もないのに、初冬の太陽はもう対岸の深い赤石沢に聖岳の大きな影を投げ初めてきた。小笹の往復を断念して尾根伝いに布引山（千槌木山）との鞍部へ下っていった。記録によると、中村清太郎は布引山の東側を巻いてこの鞍部から笹の山頂に登っている。この付近の尾根から見おろすと、大井川寄りに比較し、甲州側は急斜面で山ヒダが大きく荒々しい。布引山の山頂を越えて大ガレのフチを慎重に渡り、薄暗い原生林におおわれた小さなピークをいくつかが越えたとさびれた西沢峠に下り着いた。

迫り来る夕闇にせきたてられながら所の沢の源頭を下り、旧小舎あとに着いた頃にはもう薄暗くなっていた。早速、ツェルトを張りにかかったが風が強く、一人では思ったようにいかないので周囲にある石を集め端を押えて無造作ながら張り終えた。身を刺す風を避けて早々に中にもぐり込んだが、風は夜通し山を鳴らしツェルトを

でも食わされたらかなわぬと思いい、同行者を探したところ、後輩の甘利仁朗君が応じてくれたが、彼のつごうで命日の翌日訪問となった。

六月八日早朝新島々駅では梅雨の曇り空であったが、番所到着の頃にはすでに乗鞍山頂も雲が切れ、唐松と白樺の新緑でむせるほどで、カッコーを始め、野鳥のさえずりも賑やかであった。

先生の居所は、移住後いよめる文化人のユートーン現象もなく、約三十年住みついていられるので、すぐわかった。檜ノ木坂バス停のすぐ前で、新設の瀟洒な小住宅であった。来旨を告げると、快く屋内で引見してくださった。

聞けば、奥様は四年前御逝去、次男、三男は東京周辺に独立し、現在独居、もっぱらスピノザの倫理学の訳業に精を出されている由である。五十を過ぎた白髪のばくも、「こわい先生」の前では初めかしこまっていたが、やがて故人の追憶談が出る頃は雰囲気も和み、ひびをくずすことができた。

先生はこの一室に万年床をのべ、文学老青年の生活をしている様子だ。壁面には先生と長男の絵が数点と、今はなき奥様と長男の写真が飾ってあり、ぼく

らはこの写真に黙祷を捧げた。自生のシヤクヤクの開花を心染しみに待っていること、裏山一帯二町余歩の所有山林にはいっさい手を加えず自然の姿を保存したいことなどをうかがい、先生はまったく満足して番所の住人になりきっていることに、ぼくはその生活をうらやましく思い、また昔のぼくの愚案が杞憂にすぎなかったことを悟った。

会談約三十分後、ぼくらは先生と連れだってこの家を辞し、白樺の木をバックに記念撮影をした。そのとき、この家の傍に「サンジ小舎」と標札のある一棟の山小舎風建物があるので、何うと讃治君が卒業後できた友人連中が建てたものだそうである。これを聞いてぼくは彼の審美精神がここに生かされ残ったものと、ひとしお感激をおぼえた。気むずかし屋の先生も、御長男命日の翌日にぼくらが慰霊訪問したことを心から喜ばれ、ぼくらもまたそれを喜びとした。そしてこれから乗鞍の夏スキーを楽しむべく、ぼくらはスキーとリュックを担って先生におわかれの手をふった。

音痴のぼくは、これから誰かに『山日記』の山の歌を習い覚えて、サンジ小舎に泊まって先生の耳を悩ましてやろうと思っている。

はためかしていた。

翌朝、冷々と夜が明けた。風も少し穏やかになってきたが、赤石岳の中腹以上はすっかり雲がおおっていた。こは、かつて甲州雨畑と大井川榎島を結ぶ林道の中継点で、所の沢小舎のあった場所である。中村清太郎はちょうど四十年前（昭和九年）の初冬、この破れ小舎に泊まり画業に励んでいた。名著『山岳渴望』の巻頭を原色版で飾った「赤石岳新雪」はこのときこの付近から描いたものだ。現在、その小舎あとには残がいが苔むして朽ち果て、かつて小舎のあったことを偲ばせているにすぎない。そこに立つと、初冬の荒寥としたこの山峡で敬虔な気持で作画にふけていた中村清太郎の姿が想像されるのであった。（彼の第二集『ある偃松の独白』一二ページ以下にこのときの紀行が収録されている）

廃れた西沢峠に出ると、甲州側はすっかり濃い霧におおわれていた。峠を越えると道は荒廃し、倒木が塞ぎ、通れるような道ではなかったが、少し下ったところでよく整備された道に合流した。倒木を整理した鋸の切り口からみてごく最近手入れをしたばかりのようだった。濃い霧の中を下って行くうちに伐採人夫が一人登って来るのに出会った。聞くと、この道は稲又山、青雉山方面での伐採林道として最近整備したとの話であった。

木が塞ぎ、通れるような道ではなかったが、少し下ったところでよく整備された道に合流した。倒木を整理した鋸の切り口からみてごく最近手入れをしたばかりのようだった。濃い霧の中を下って行くうちに伐採人夫が一人登って来るのに出会った。聞くと、この道は稲又山、青雉山方面での伐採林道として最近整備したとの話であった。

私の日記の自慢にもなっている。山のパイオニアであられる山岳会の諸先輩と山行をともしして、そのお元氣な登山姿をわが日記におさめることができるのは、非常に光榮なことであり、自分のへばったのも忘れて、やたらに飛び回り下手な8ミリを回してしまいう次第なのである。

じめての方もいらっしゃる。今日はその一端をご紹介申し上げたいと敢えて筆をとった次第である。まず山岳会の記録は、四十七年度、秋田支部の支部長会小集会の鳥海登山より決行することにした。私はあまり先輩方のお顔は知らない、お名前は多少知っている程度である。

グリンデルヴァルト・リート

井手 貴夫

羽後矢島町に集合した際、秋田支部創立者の荒巻広政さんをまず知った。ついで成瀬副会長、越後の藤島玄、沼倉寛二郎、諸岡一

佐々保雄さんからグリンデルヴァルト・リートの歌詞を送ってきて、これを訳してほしいと頼まれた。昨年ローランド・ルーディンが東京へ来たときの歓迎会にグリンデルヴァルト・リートをみんなで歌った、と会報に出ていたのでどんな歌なのだろうと私が聞いたわけなのだ。しかし、送られてきたそのスイス・ドイツ語は残念ながらとても私の手に負えないので、ローランド・ルーディンへのクリスマス・カードのついでに、この歌を標準ドイツ語に訳してほしい、と書いた。思いがけずサミュエル・ブラヴァントから

多少の改訂が必要だろう。
Grindelwald-Lied von Gottfr. Strasser
Ins Hochdeutsche übersetzt von S. Brawand
In Grindelwald den Gletschern nah,
Da lässt es sich wohl leben.
Wir haben seit unsern Hiersein
Noch nie Heimweh gefühlt.
Drum geht soweit euch die Erde trägt
Zum Mond, auf die Sonne,
wenn ihr wollt,
Ihr findet nicht von Form und Gestalt
Ein Schöneres Tal als Grindelwald.
In Grindelwald den Glets-

老いらく山日記

高橋 憲二

私の山日記はカラーの8ミリで書いている。文を綴ることの下手な私には日記帳は苦手である。数年前、8ミリを回しはじめたのが

きっかけで「老いらく山日記」と名づけて、年来の山歩きを記録していきこうと思いついた。そうしてはじまったわが「山日記」はいつ

きつかけで「老いらく山日記」と名づけて、年来の山歩きを記録していきこうと思いついた。そうしてはじまったわが「山日記」はいつ

さん等みな元気な先輩方である。バスのなかで野口末延さんと山形の後藤幹次さんにお会いする。

開業早々の大収穫である。翌日の登山は快晴に恵まれて、麻生武治さんがピッケルを肩に蒸気機関車が爆進するような元気な姿でまずトップを切る。私の8ミリも回りはじめた。雪溪の急坂で近藤信行さん？ と思われるご夫婦連れに（まちがったらお詫び申します）近藤さんが奥さんに、アイゼンを付けていられる優しい風景をなんでも逃がそうか、ご夫婦のはじらいの笑顔に私もついにつりこまれてしまった。素晴らしい、一カットである。

当夜の国民宿舎での盛大なる大宴会は先輩、後輩入り混じっての一大シンフォニーが展開された。私は飲むのも忘れて、フィルムを何本も入れ替えた。また、個室では山里寿男画伯の山の画の実地講習会が開かれている。

翌朝宿のロビーにおいて、諸岡一次さんと沼倉さんの静かなる閑談の一刻を私はお許しもなくカメラに収めた。今になってみるとなつかしくも悲しい思い出の一コマになったのである。山行より数ヵ月を経ず諸岡一次さんと荒巻広政さんのご逝去を聞き、あのお元気な姿をまぶたに浮べてしみじみ人生の無常を感じた。いつまでも私の8ミリに残っておられるお二人の元気な姿、謹んでご冥福をお祈りする次第である。第一回の私の日記帳は大きな収穫の下に終了した。

第二回の四十八年度北海道支部の会合にも大いなる収穫を期待して勇躍参加した。北大の植物園の入口が参加者の受付である。成瀬さんと網倉さんがお見えになり、佐藤テルさんも元気に優しいお姿でお目にかかる。野口末延さんと村尾金二さんが元気にバスを降りた。まずまずの嬉しい予想である。十勝スキー場での開会式にはいるわいるわ、全日本の山やが一堂に集った感じ、今西会長、伊藤北海道支部長のにこやかな挨拶に皆さまのお顔も晴々とした面持である。噴煙の十勝岳、残雪の富良野岳も晴天に輝いている。私のカメラはまたまた、回りっぱなしである。

白銀荘での一夜は、北海道支部の皆さま方のご努力で充分すぎるほどのおもてなしであった。平野さん、浅利さん他大勢の支部員の方々に厚くお礼を申し上げる。雪だけの激しい沢を徒渉し、ガラガラガラのガラク場に足をとられ、雪溪によじのぼる会長はじめ藤島さん、野口、成瀬さんまた松本熊次郎さんが元気な足どりでゆっくり雪を踏みしめて登られる。先輩方のたのしい山行である。私も前になり後ろになり先輩の姿を追う。こんなに多勢の先輩が、旧噴火口からの噴煙にむせながら一列に

chern nah,

Da kann auch Schneewind

brausen,

Von Zeit zu Zeit, kommt's

wohl auch vor,

Dass uns der Föhn zum

Narren hält.

Das schadt uns nichts. Wir

denken: "Bias!"

Wir haben desto eher Gras.

In schön und trüb, in warm

und kalt

Kein Schöner Tal als Grin-

delwald.

In Grindelwald den Glets-

chern nah

Da woll'n wir Freiheit wahn-

ren.

Woll'n immer tapfre Schwe-

zer sein.

Und das Herz nicht erkalten

lassen.

Für das Gute wollen wir

einstehn,

Und die Boshheit nicht herein-

lassen,

Und singen wollen, wir Jung

und Alt,

Kein Schönes Tal als Grin-

delwald.

In Grindelwald den Glet-

schern nah

Kommt einst der Tod, Wir

grüssen ihn.

Hier woll'n wir auch begraben

sein.

Im Friedhof bei der Kirche.

O klaget nicht bei unsrer

Leich!

Der einzige Ort ist das Him-

melreich,

Wo's unsreinem noch besser

gefällt

Als hier im schönen Grindel-

wald.

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald

Grindelwald Grindelwald



カット／
松本慎太郎

なつて登山する姿は、恐らく日本山岳会のいずれの記録にもない、前代未聞な？ ことであろう。

私はこう一人自負しながらいろいろの角度から夢中になつて先輩の姿を追つた。雪溪の途中で私の8ミリは広羽清さんの大事なお臍をまず写してしまつた。伊倉剛三さんがガラ場の急斜面で、いの一審にお手をあげられお尻をついた姿、これもカメラに入つた。いずれもカメラのいたずらであらう。

十勝の山頂は素晴らしい。あで

船形山残感

伊達篤郎

去る六月中旬、日本山岳会創立七十周年を記念した宮城支部企画の船形山行には東京から望月副会長や大長老の野口さん、北海道からはおなじみの平野さんなど、紅三点を加え総勢三十名余、盛会裡に終了し得たこと、ご参加の皆さんや特に担当幹事に改めてお礼を申し上げたい。

定義での前後、さすがに如來様も翌日には標高千メートル以上の雲を払ってくださるなどで利益満点、梅雨最中にしては快適な山行であった。頂上三、四十分ほど前で、板橋さんからのビールの差入れがあり、喉がカラカラの私は、頂上まで行くか、ビールを飲

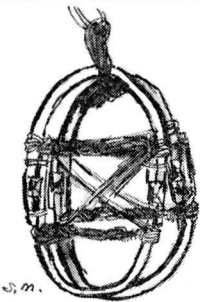
やかな茶会が開かれ、会長はじめ成瀬、藤島、松本、伊倉剛三さんその他の先輩方の楽しいうたげもたけなわである。空はますます晴れ、となりの美瑛富士もすばらしい。これらの貴重なシーンにはすべて私の掌中にあり、山日記に収められた。どうぞ諸先輩の皆さま、ますますご健康にご自重あらせられ、引つづき私の8ミリにお元氣な姿をとどめられんことをお祈りして老いらく山日記の第一輯を終りに致します。

んで頂上を断念するかの二者択一を迫られ、ついいつもの悪いくせがでてビールを飲むこととなり、頂上での万才には参加しないで折返した。途中野口さんや8ミリ撮影の高橋憲二さんに出逢い、そのねばりに敬意を表した次第である。

久方振りの横川林道、ブナの伐採も終わったのか事業所にも人気がない。人の臭いのしない船形山の本質を取戻した感じもしたが、反面コースの荒廃振りにはいささかうんざりさせられた。先に頂上断念をビールのせいにしたが、実はこの悪路で足をとられるなど無理は禁物と考えたのである。往路車

を降りて後白髪前山までの直登一時間、かつて鳴物入りで売り出し地図にも挿入された道は嘘のような荒れ方。かつて女性が二人危うく助かったときを思い出す。東北の山はいい、未開で素朴で自然が残されているという。それは道が荒れて遭難のスリルを味わえるという意味ではないはず。県立自然公園に指定されて二十年余り、ブナの原生林は目茶苦茶に切り倒され、代つて唐松や杉の苗が植えられた。遠く仙台からもそのぶざまさが眺められるほどである。山をけずり車道をつくり木をなぎ倒し山道がなくなる。やがて作業が終ると事業所が閉鎖され登山道がいちじるしく荒廃し放置される。一方では国定公園にしようとしてわざと立てている。この矛盾をどう考えたらいいのか、船形山にその実例を見た思いがする。

東京や北海道からお礼の手紙を頂いた。木の根やぬかるみに足をとられてのクマザサに覆われた県立公園のあの悪路には一言もふれていない。しかし船形の自然と共に地元の無関心のほども記憶に深くとどめていかれたと思うのである。



カット／松本慎太郎

昭和五十年度山梨支部総会報告

昭和五十年度山梨支部総会は、九月二十日（土）午後三時から甲府市教育センターで開かれ、事業報告、行事予定、会計報告、予算報告などが行なわれた。

行事としては、十月の木暮祭を支部の正式行事とすることを決定し、また、本年度役員には支部長に大沢伊三郎氏（留任）、理事長に岩間昇氏（再任）以下の役員を決定した。なお、東京からは山崎安治氏が来られ、種々懇談した。

創立七十周年記念北海道集會報告

七月七日午後六時札幌雪印バーラーで開かれ、狩場山（一五一九メートル）の登山を終えた今西会長も元氣な姿を見せ、大塚支部長の挨拶、続いて今西会長、そして塩田さんの乾杯の音頭でビールが注がれ、一言スピーチや北海道の山からヒマラヤまでの話題が続き、午後九時過ぎ漸く散会したが、大部分は二次会に流れ、出席者数の割には大盛會であった。

参会者名

今西錦司、阿達憲、高沢光雄、大塚武、山川力、平野勝也、平野明、塩田輔雄、萩谷三枝子、柳田涼子、伊藤寿雄、浅利欣吉、青山義信、新妻徹、今村朋信（順不同、敬称略）

武蔵野の夕べに

ヨーデルを聞く会報告

昭和四十六年以来、吉祥寺成蹊学園付近の道路問題で中断されていた「ヨーデルを聞く会」を、去る九月二十日午後六時に、仲秋の名月の夜、七年振り、三水会主催で再開することができた。

武蔵野の面影を残す成蹊学園脇のすばらしいけやき並木に近い小鳥の声と緑の林に囲まれた広い庭園を、会場として提供してくださった今井嘉道氏より、まず道路計画でこわされそうになった庭をこの七年間守り通して、また再びJACの皆さんの会を開くことができたという経過や、庭の緑や小鳥の世界をこれから大切に守ってゆきたいというお話を伺って、会員一同深い感銘を受けた。

次に沼倉氏の音頭で再開を祝って乾杯し、出席者の自己紹介を行った後、ヨーデルの響きに耳をかたむけ、十五夜の名月の光を浴びながら、楽しい歓談が続いた。そして八月の三水会で発表された高橋照氏のネパールのスライドのアンコールがあったので、再度野外で、秘作スライドの初公開もあり、時のたつのも忘れ、少し予定の時刻も過ぎた九時半頃、虫すだく今井邸の庭に名残りをおしみつて解散した。

なお、当日は御準備にいろいろ

お骨折りくださった今井家のご家族の方々に誌上より厚くお礼申し上げます。
(坂倉登喜子)

出席者名

網倉志郎、瀬名貞利、沼倉寛二郎、高橋照、中保、川崎精雄、堀川英司郎、今井嘉道、同直子、同道雄、森川洋佑、中川恵資、曾田莊太郎、今井喜美子、斎藤桂、隈部恵子、応崎慶子、佐野千賀、佐野登代子、田島帝子、黒沢秀子、館野昭子、橋元都美子、佐藤ちえ子、名取みゆり、小幡光子、坂倉登喜子
(順不同)

アルバータ登頂

五十周年記念会報告

マウント・アルバータ登頂五十周年記念会が、九月六日、東京・大手町の農協ビルで開かれた。横有恒氏のユーモラスな回顧談は、驚ろくほどの記憶で、登頂経過に織り込んで「岡部氏(長量隊員)の映写機は三貫五百匁もありました。毎日フィルムに収めていたのですが、それは現在残っていないせん」と残念そうに語られた。送別会での「死を決して行なう」の辞に対して、「山は死を覚悟して登るものではない。手に負えなければ帰ってきますと答えました」と、かわらない登山観も披露された。

故細川護立氏の実妹川崎久子さんは「きょうは兄の祥月命日です。ことしは八ヶ岳に登って、兄

の名を叫びました」と七十二歳とも思えない元気を披露、また早川種三、三田幸夫の「両隊員」はともに山登りは省略して、「横さんにはマナー(テーブル)が守れなくて登山以上に叱られた」(早川氏)、「ジャスパー・ロジでは女子大生と居合わせたが……」(三田氏)といまだから話せる風呂場の珍談に爆笑の三時間だった。戦後同峰登頂を試みた川口岳連隊の池田甚兵衛氏、長野高校OB隊の田島守氏の登高談もあった。また会場には細川護貞氏(護立氏実弟)が最近探したされた隊員の写真など多数が飾られてあった(司会は織内信彦氏、乾杯の音頭は西堀栄三郎氏)。

なお、この会合の残金一万四千七百四十円は、山研建設資金として寄付された。
(片山全幸)



ぎふ百山

岐阜県山岳連盟
ぎふ百山刊行会

「……『ここハゲン谷』と書いた指導標なんぞどこにもありません。ハゲン谷と判断しているのはよく自身なのだ。それがまたいい。

地図を読み、時間を案じ、眼を光らせ、耳を澄ましてみると、ここがハゲン谷出合であることが、自らわかってくるのである。……」こんな記述に接すると、まったく楽しくなってしまう。これこそが本場の山登りではないか。

本書「ぎふ百山」(正確には一二〇座)は、一部北アルプスほかを除いては、ほとんど人に知られていない岐阜の山々を紹介している。標高九〇〇メートル以上で、山麓の人々とかかわりの多い山を選定の基準にした、と「あとがき」にあるが、それらの山の多くが冒頭に引用した記述どおりの道のない山々である。日本には、もうおもしろい山はなくなったと口にしちがちなものだが、本書を手に入れば、それがいかに僥越な言葉かか思い知らされよう。

まことに、新世界に目を開かせてくれるのが、本書なのである。見開き二ページで一山を扱い、その山に関連した文章があるのはもちろん、写真、地図、交通・宿泊案内などの項目がついている。関連した文章とは、歴史、伝説、紀行など多彩な紹介記事のことで、時に少々脱線気味なところもあるが、これがまた楽しい。付録に、岐阜県地質と地形、気象、山の動植物の詳細な説明がある。

B5判二七〇余ページ 昭和五十年七月一日 岐阜日日新聞社発行 二千円(横山厚夫)

忘年会のお知らせ

日時 12月19日(金)午後6時
場所 日本山岳会ルーム
会費 一〇〇〇円

今年もたのしい一夜にしたいといま趣向をこらしていますが、その一案として例年のプレゼント交換のかわりに何か小さいものを持ちよって即席のパザールを開こうと予定しています。詳細は別途お知らせいたしますが、みなさまのご協力をお願いします。

主催 集会委員会、婦人懇談会
『東海山岳第三号』頒価変更

会報第三六一号(一九七五年七月)で『東海山岳第三号』の発刊をご案内いたしました、その後諸物価高騰の折、最終的に製作費が予定をかなり上回ってしまいました。そこで、はなはだ不本意ながら本書の販売価格を一冊につき二七〇〇円(うち送料二〇〇円)に変更させていただきたく存じます。悪しからずご了承下さい。

東海支部

元役員

村尾金二氏を悼む

九月二十七日、国立ガンセンタにて逝去。享年七十二歳。明治三十六年五月十一日誕生。昭和三年東京商科大学卒。昭和八年三月

茨木猪之吉、吉沢一郎両氏の紹介により日本山岳会入会、会員番号一四三五番。昭和十六年二月幹事、昭和四十八年監事。会務に尽くされたほか年次晩餐会、有志閑談会等本会行事への参加も長年にわたって非常に多く熱心な会員であった。

一橋山岳部時代から大いに活躍され、昭和二年三月針ノ木峠越え(信州側から立山室堂へ)、昭和十年十月北岳バットレス第四尾根第二登などの記録がある。なお戦前からつい最近まで毎年欠かさず数回の山旅をつづけれ、その足跡はきわめて広がった。

葬儀は九月二十九日文京区海蔵寺で挙行され本会から生花を供え、また山の友人代表として藤島名誉会員が弔辞をのべた。嗣子統一氏も本会々員である。村尾氏の逝去に対し本会は深甚なる哀悼の意を表する。
(望月達夫)

昭和五十年十一月二十日発行

113 東京都文京区湯島一六六一
利根川商事株式会社

発行所 法人 日本山岳会

発行人 今西 錦司

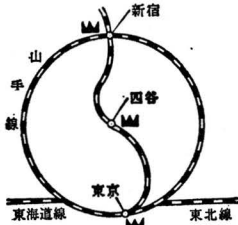
編集代表 大森 久雄

(813)二二八六(代表)
振替口座東京四八一九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂

登山・スキー用具専門店

●買いやすい
山の店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736●北へ来たら
山の店●フレッシュな
山の店

四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なるべくなんにも
持たない方がいい
けれど、どうしても
要するものがある。
なにしろ人間ですから
そして、山ですから
どうしても必要なもの
をこしらえてやる
責任はもっています

かたるギンティ
でんや 28128456
中央区・八重洲4の1

香山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上一丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440



坂本直行

厳しい開拓のクワを持つ傍ら、好きな山に登り、美しい北海道の自然を心ゆくまで眺めて、描き綴った楽しい作品集。

新刊

山・原野・牧場 A5判 134頁 口絵淡彩
¥1,500 円 200

—ある牧場の生活—

山のことはあまり出て来ないでも、ほんとうは牧場に立つて山を眺めている人の気持を書いたものである。ほんとうの山を知っている人の日記である。そういう意味でこの本は山の本であり……山崎春雄

画文集

雪原の足あと

「雪原の足あと」は直行の生涯の一つの転機を記念する本である。つまり30年間離したことのないクワと決別して、一人の画家としての直行がここから出発するのである。……松方三郎
B5判 206頁 ¥3,800 円 300

原野から見た山

右手の柏の樹林の上には南日高の山群が、とんがった美しい起伏を見せていた。僕ははじめて見る原野からの山の姿を幾枚かスケッチした。それは実に心のたのしいものであった。……本文より
B5判 144頁 ¥4,200 円 300

開墾の記 A5判 230頁 口絵淡彩
¥1,400 円 220

あのすさまじい重労働と貧乏に耐えて過した30年は、何によって支えられていたのだろうか……それは私をとりまく自然の美しさと、私を打ちのめした自然の厳しさであった……もう一度当時のようなエネルギーと情熱が欲しい……再版の言葉より

淡彩画えはがき 6枚1組
北海道の山・原野・花 ¥300 円 40

茗溪堂

東京都千代田区神田駿河台2-1
振替東京 8-24723
最寄り書店又は直接ご注文下さい

会 務 報 告

9月理事会

(9月5日午後6時本会ルーム)

▽出席者 今西会長、織内、望月、各副会長、浜野、高遠、山本健、近藤、小倉、山本良、皆川、大倉、黒石、田村俊、神崎、橋本、浜口各理事、林監事、小原、折井、宮下各評議員、委任 大森、田村宏、浅田各理事、太田監事、浜野評議員

▽議案

・エベレスト登山許可について(宮下) 八〇年、八一年は明大隊との競合やJACは二度目だということなどで許可が得られなかったもので、この計画は一応白紙にもとずことにする。

了承

・ナンダ・デヴィ準備委員会について(浜野)

了承

準備委員会の設置と委員・顧問には会長名で委嘱する。

了承

・学習院カラコルム登山隊および稲門山岳会カラコルム登山隊の都岳連に対する推薦状交付について(浜野)

了承

▽報告事項

・指導

(大倉)

十一月二十二日・二十三日富士山で雪上技術講習会を開催

・海外

(田村俊)

UIAA派遣者を佐藤テル氏に変更

・山岳名著覆刻

(近藤)

年次晩餐会には全冊が出る予定

・山岳編集

(近藤)

六九年は年次晩餐会までででき上がる予定

・集会

(神崎)

九月十日専大ヒマルチュリ報告会、九月二十日日本女子エベレスト報告会、九月三十日都岳連ダウラギリI

峰報告会、十月三十日静岡大テラムカシリ報告会
・「高所登山研究」第一巻でき上がる。

・図書

(山本良)

図書交換会を十月二十五日に開催

穂高岳涸沢集会報告

青年懇談会

青年懇談会(今村千秋委員長)では本年も八月十日から十六日まで、穂高岳涸沢で現地集会を行いました。

涸沢集会は青年懇談会の創立とともに若手会員の熱意で毎年行なわれて来ましたが、今年で第四回を迎えました。八月十日に上高地の山岳研究所から荷上げを行ない、十六日に天幕を撤収する間、天幕宿泊者は延べ四十二人に達しました。

年々利用者が増えておりますが、まだ青年懇談会の涸沢集会について理解されていない会員が多いためか、あるいはP・Rの不足もあってか、当所予定していた人数にもう一步であり残念でした。

この集会は、青年懇談会の主催で、夏の涸沢のキャンプを広く会員の方々にも楽しんでもらおうと企画したもので、宿泊できます。今年度は約半分は非会員の方でした。それに、青年懇談会のメンバーが、参加者を北穂高岳や、前穂北尾根等へ連れて行ったりして家族的な雰囲気であったと思います。十六日の夜は、上高地の山研にて二十三名の参加を得て盛大なコンパを行ないました。

なお、本涸沢集会は集会委員会および学生部の協賛で行なわれ、多方面に協力をしていただいたことに感謝申し上げます。(桐生恒治)

ルーム日誌

(50年9月)

1日(月) 集会委員会、婦人ヒマラヤ研究会

4日(木) 常務理事会、ナンダ・デヴィ委員会

5日(金) 理事会

8日(月) 集会委員会、婦人ヒマラヤ研究会

9日(火) 青年懇談会、図書委員会

10日(水) 第三三三回小集会、財務委員会

11日(木) ナンダ・デヴィ委員会

13日(土) ナンダ・デヴィ委員会

16日(火) 集会委員会、婦人ヒマラヤ研究会

17日(水) 学生部、ナンダ・デヴィ準備委員会

18日(木) ナンダ・デヴィ委員会、書評委員会

22日(月) 集会委員会、婦人ヒマラヤ研究会

23日(火) 集会委員会

25日(木) 自然保護委員会、ナンダ・デヴィ委員会

29日(月) 集会委員会、ナンダ・デヴィ委員会

30日(火) 第三三五回小集会

9月中来室者四六八名

改 名

七八〇〇 柳沼シゲ子

支部変更

七三六〇 山田 新 東京

五五四一 青木 宏悦 東京

六二九〇 水越 武 信濃支部

六〇二九 武田 宗之 東京

除籍取消者

五三三四 落合 永子

六二九〇 水越 武

登山対象山域を中心に図取りした本格的な山岳地形図集。

学研版 日本山岳地形図集成 全2集

縮尺1:50,000 吉沢一郎他編 / 定価=各12,000円

【第2集 中部山岳(南部)→九州編】 新発売!

第1集●発売中

北海道→中部山岳(北部)編

●B4判・全202P(収録地図61図・解説及び解説図99P)

北海道14図/東北16図/北関・上信越15図/中部山岳(北部)6図

第2集

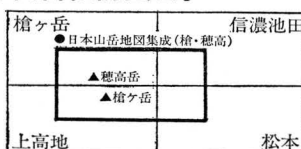
中部山岳(南部)→九州編

●B4判・全190P(収録地図38図・解説及び解説図81P)

南関・中関11図/中部山岳(南部)9図/北陸・美濃3図/紀伊3図/中国2図/四国2図/九州8図

「地形図」+「ルート図・解説」の山岳検討図書。

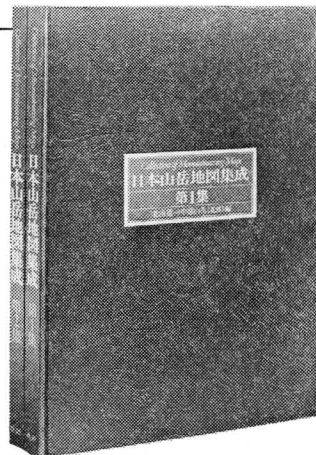
●国土地理院1:50,000地形図を含む1,500m以上の山岳を1:50,000で収載し、コース、キャンプ地等を記入。●概念図、行程図、ルート図、宿泊、交通、人文、動・植物、参考文献等を詳解。



学研

学習研究社・販売局

〒145 東京都大田区上池台4-40-5 ☎03(720)1111(大代表)



★お申し込みは、★お近くの書店へ★
「内容」本希望の方は、学習研究社・販売局へお申し込みください。

物故者

六四七二 氏家 民雄(50・9・6)
 一四三五 村尾 金二(50・9・27)

● 会員通信

今夏はJAC新潟支部のお招きを受け、金坂、今井両会員と共に八月二十五日の高頭祭に参列の後、弥彦山の登山祭に参加して、越後の岳人の盛大な行事に、その熱気と心意気に驚いてまいりました。その帰りに皆さんの協力で建てられたという立派な山荘・梁山泊に一泊、飯豊山腹の清冽な水に恵まれた山荘で、斎藤平七氏他皆さんの手料理で一夕歓談、翌日は荒川峡の雲母温泉に汗を流して、米坂線回りで帰京しました。今回は支部の藤島玄氏、斎藤平七氏他皆様にたいへんお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

さて私どもはヒマラヤのエーデルワイスのふるさとを訪ねて、来る十月二十日より約一ヶ月間、アジア原産の花の発祥地ランタン谷へ会員七名と共にトレッキングに出発いたします。

目的はクラブ発足二十周年記念行事の一つでもあります。クラブのシンボルでもあるエーデルワイスのふるさとを探访して、二十年來の夢である花との対面と、来る昭和五十一年春の写真展のための取材も兼ねてまいります。

幸い去年マナスル隊長としてネパールへ行かれた会員の黒石ドクターが同行してくださるので、会員一同安心して行けそうです。

また、帰国後報告致しますが、留守中はなにとぞよろしくお願い致します。

(エーデルワイス・クラブ

坂倉登喜子)